慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アーヴィング・ハウ編著『ニュー・レフトの彼方に』
Sub Title	Irving Howe ed., Beyond the new left
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1971
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.44, No.7 (1971. 7) ,p.136- 140
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19710715-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Irving Howe, ed.,
Beyond the New Left:
New York, The McGall Publishing Co., 1970, 249 pp.

アーヴィング・ハウ編著
『ニュー・レフトの彼方に』

Dissent をはじめ、*The New Republic, Encounter, The New York Times Magazine* そのほかの雑誌に発表された諸論文が、この度、アーヴィング・ハウのかなり長い序論を付して、一書にまとめられた。題して『ニュー・レフトの彼方に』とされているところから察知されるように、本書は明らかにひとつの政治的立場――より正確に言えば、『ディセント』誌ならびにハウ自身の思想的見解――を表明したものである。それに関して、筆者はかつて論じたことがあるが(「新しいラディカリズム、あるいはイデオロギーの復活?」本誌第四十一巻第五号参照)、それは、三〇年代の旧いラディカルズの「イデオロギーの終焉」に対して、五〇年代の新しいラディカルズが、その衣裳をあらためてラディカリズムを蘇生させつつ、しかもニュー・レフトとの共棲をラディカルに拒絶する「デモクラティック・レフト」の立場にほかならない。だが、六〇年代も進むにつれて、ニュー・レフトの暗かりになだれ落ちてゆくようなコミットメントは深まるばかり、新しいラディカルズの憂いも色濃く、その責任の真摯さから、それに対する応答は困難をきわめているかのように思われる。

したがつて、デモクラシーの諸価値にコミットしていることを表明するハウは、みずから数篇の論文を以て、さらに序論のなかで来るべき十年を予示しようと試みる。ニュー・レフトとは、過去十年間に、ジャーナリズムを風靡した言葉であつて、その組織や性格がつねに一貫した構造を具えているわけではない。このことは、例えば、一九六七年にシカゴで開催された Conference for a New Politics の結果の惨状をみても一目瞭然である。しかし、この現象が、たとえアメリカ社会のきわめて限定された部分に現われたものであつても、全国あるいは地域の政治に、そしてアメリカ外交にさえ、重大な影響を及ぼしている事実を見逃すことはできないだろう。そこでハウは、ニュー・レフトの歴史的背景を探究しつつ、現代における問題状況を把握しようとする。

ハウにしたがえば、ニュー・レフト運動は、明確に区別されうる二つの段階を経過してきた。第一段階、つまりニュー・レフトの初期はすでに五〇年代に端を発するニグロの公民権運動であつて、そこにはアメリカ的伝統のポピュリスト的、平等主義的理想が漲っていた。それは非暴力的であると同時に、「参加デモクラシー」の要求を掲げ、一九六三年夏のミシシッピー州における生活と労働の実践活動に表徴されよう。ところが第二段階に到つて、ニュー・レフ

ト、とりわけその主流をなすSDSは激しい変化を遂げる。ヴェトナム戦争の拡大化、黒人の若者たちのあいだでの分離主義的感情、リベラルな運動への一層深い絶望感、「第三世界の革命」への魅惑、これら相重なる原因によって、ニュー・レフトは、荒々しい反逆と狂気へと変転して行つた。かつてスターリンがヒットラーの勝利を「社会的ファシズム」と言つたが、SDSのそれは「リベラル・ファシズム」へと形態転化し、権威主義的《前衛》は分派的な荒地へと漂いながら、極度のイデオロギー化とドグマ化を伴つて、デモクラシーの基礎そのものをも破壊し去ろうとしている。前SDS全国書記長グレッグ・カルヴァートが悲嘆しているように、「ニュー・レフトのスターリン化」という、みずから否定したはずの頽廃傾向に陥る綺想異風が生じてしまつた。しかも今日、われわれは、それが第三段階にさしかかつている気配をさえ感じる。テロと暴力の冒険主義、まったくの holiganism, それは社会的病理の徴候をいちじるしくし、一八八〇年代のロシア・テロリスト群像を想起させる、かのネチアエフの政治を。

このような急激な変化はなぜ起つたか。その理論的な問いかけは、内的・外的な議論の構造をもつていようが、ハウ自身が示唆している二つの理由も、そうした意図を明示しているように考えられる。第一に彼は、「アメリカ自由主義の危機と実質的な堕落」をあげる。六〇年代には、ケネディ政権とユージン・マッカーシー大統領候補に対する短期的な支持があつたとはいえ、リベラルな政治は、大学キャンパスの内外を問わず、理想主義的希望を抱く若者から遠去り、リベラリズムの理念一般への虚ろな幻滅をかもしだして行つた。かくして、ニュー・レフトは限界的人間へと萎縮せざるを得なくなつた。しかも第二に、「初期と後期のニュー・レフトの思想の内的関連」が存在する。道徳的衝撃とニヒリスト的憔悴のなかで、デモクラシーの規範と方法に対する不信感が高まり、いわゆる「参加デモクラシー」から「革命」への政治的な——そして非政治的な——表現の儀式化が起つた。彼らの抗議は今後も引きつづき行われようが、その非合理性と暴力行為が道徳的正当性を獲得するかどうか。デモクラシー的社会主義の諸価値にコミットする人びとにとつては、人民の幅広い連合を結集・組織化する展望を、つぎのように提示することが望ましい。

(1)われわれは現在のところ、「革命的状況」にはなく、また近い将来においてもそうではないという前提。

(2)来る数年のあいだ、かりに「革命行動」がいよいよ声高く叫ばれようとも、それはエリート主義、絶望的な錯乱、冒険主義といつた性格を帯びるであろうという副次的前提。

(3)現在のデモクラシー政治は、いかに損傷を受け、堕落しているとはいえ、それを保持し改善することがわれわれの利益であるという信念。

(4)リベラル＝労働者＝左翼連合——強調点や内部構造はニュー・ディールとは異なる——をふたたび活性化することによつて、必要な社会・経済的諸改革が実現可能であるとする診断。

ハウは、伝統的なニュー・ディールとポスト・ニュー・ディール

の自由主義の限界内にとどまつている限り、ニュー・レフトを鼓舞している理想も情熱も理解できず、みずから失敗に帰する運命をはつきり認識している。かかる視座にもとづいて、彼らに対抗する論陣を張り、団結を象徴する握りしめた鉄拳が押された一書を送ろうとするわけである。それは第一部「分析と批判」、第二部「人物とテーマ」から成り、全部で十五篇の論文を含む（Part One: New Styles in "Leftism" by Irving Howe; The Mystical Militants by Michael Harrington; "Confrontation Politics" is a Dangerous Game by Irving Howe; Unreason and Revolution by Richard Lowenthal; The New Reformation by Paul Goodman. Part Two: Pure Tolerance: A Critique of Criticisms by David Spitz; Fanon and Debray: Theorists of the Third World by Lewis Coser; A Day in the Life of a Socialist Citizen by Michael Walzer; One-Dimentional Pessimism: A Critique of Herbert Marcuse's Theories by Allen Graubard; Revisionist Historians and the Cold War by Henry Pachter; "Middle-Class" Workers and the New Politics by Brendan Sexton; Black Studies: Trouble Ahead by Eugene D. Genovese; The Case for Professionalism by Robert Brustein; The Black Panthers by Theodore Draper; Turning on for Freedom: The Curious Love Affair of Sex and Socialism by Erazim V. Kohák)

ニュー・レフトの反抗には、アイゼンハワー時代からの豊かさの欺瞞、既成体制、旧世代に対する敵意と憤怒が渦巻いている。だが、そのイデオロギー的パロディにもかかわらず、実際には「パーソナル・スタイル」（ハウ）なのである。その実存的誠実さは、あたかも地に呪われた者であるかのごとく、「神秘的戦闘者」（ハリントン）として立ち現われる。その「崇高な野蛮人」を装う態度は、貧困な労働者階級のそれとは異なり、中産階級の若者に特徴的で、己れをも欺く。新しい米国語となつた Confrontation Politics は、まことに危険な即興的ゲームにしかすぎない。それは、ネオ・ファシストの同じような暴力の仕返しを受けたらどうするのか。暗闇の恐怖と白日の事実をはつきりと区別しなくてはならない。グッドマン――彼は以前ニューレフトをもつて任じていたが、最近その師傅の役割を追放された――は、幾分彼らの反逆を同情的に眺め、宗教改革前夜になぞらえるあたり興味深いが、この運動が続くとしても、一体どこへ向つて行くのか自分には分らない、と述べている。ベセルとかワイト島でのロック祭典は、巡礼の旅路であつたのか。マリファナとセックスの恍惚境は、新しい宗教を求めるメタフィジカルなものであるのか。宗教改革期の人びとと現代の若者との相違、それは道徳的人格、政治的意志、そして常識の欠落である、と指摘されるが、実際にこうしたことは、たんに老いたる者の偏倚性として片づけるには余りにも多くの問題と危機を含んでいるように思われる。

ローウェンタールの「非理性と革命」という標題には、明らかにニュー・レフトの教導師（グール）ヘルベルト・マルクーゼに対する辛辣な皮肉がこめられている。すなわち、「西欧のニュー・レフトの発展にとってのヘルベルト・マルクーゼの思想的重要さは、歴史の理論によって裏切られたと感じているマルクス主義的ユートピアンのこの絶望を、彼が古典的に定型化したということだ。『理性と革命』の著者は、いまだにかの女神に信頼を置いている。『一次元的人間』の

著者にとつては、悪魔こそ近代世界のプリンスである」と。しかしながら、彼の論文は、マルクーゼのように、怨嗟に充ち溢れた、切嚙する言葉を綴つたようなものではない。先ずマルクスの古典的思想において、行動とユートピアとが歴史的法則によつて媒介され、その限りで歴史《理性》への信仰に裏づけられていたことを明証する。その後のマルクス主義思想の発展は、レーニン・毛沢東・カストロ・ゲヴァラへと変貌してゆくが、ローウェンタールは冷静かつ緻密にその展開を素描する。そして、現代の新しいタイプの革命運動には、合理的媒介項（歴史的構成体）を無化して、直接的な行動主義とユートピア主義とを癒着させているところに特徴が見出される。マルクス主義者が反革命化し、革命的人間が反マルクス主義化するパラドックス、彼はそこに初期社会主義（空想的社会主義）への回帰を認める。ニュー・レフトは、ローウェンタールによれば、政治現象ではなく、西欧文明の危機の兆しにほかならない。それに対する単純な解答を持ち合わしていないことを告白するのに、彼はけつして吝かではなく、結論として、新しい反抗者を *diabolus ex machina* であるかのように《敵》視することは誤りであると言う。もちろん、それは正当であろうが、「絶望に息吹きを与えられたユートピア主義」が、われわれにいかなる未来の希望を告げることができるのだろうか、やはり問題は大きくとり残される。

第二部の冒頭論文「純粋寛容――批判の批判」は、スピッツがマルクーゼらの著『純粋寛容批判』に対する論評として書かれたものである（筆者は、これについても本誌第四十一巻第十二号の書評欄に触れておいた）。その他にフランツ・ファノン、デブレらの思想、ブラック・パンサー、大学問題等さまざまなテーマにわたつて論じられている。コハークの論文は、性愛のうちに生と死の衝動というアンビバレンスがひそむことを明らかにしつつ、社会主義社会という奇妙な実験モデルに名を借りた「コミューン・主義的」セックスの幻想を示したもので、一粲に供すべきであろう。ヴァルツァーの「社会主義的市民生活のある一日」は、マルクスの心に描いた非政治的な生活の未来像を念頭に置きながら、恐らくもつとも禁欲的な自己犠牲を、社会主義のための全生活のコミットメントを強制されるであろうラディカル・ポリティックスというものに嘔吐を感じさせられる。アメリカ市民ならずとも、かかる生活の一日にいかにして耐えられようか、「市民的不服従」を強く擁護してやまないヴァルツァーの文章に、無神経でいられる者は余程のマゾヒスト以外にいなかろう。

グローバードの「一次元的ペシミズム」は、鋭いマルクーゼ批判である。確かに、《一次元性》とは、高度産業社会を特徴づけるひとつのメタファーとして、マルクーゼ自身の任意で、奔放な構想力が歩き廻るには都合よい。例えば、グローバードはつぎの言葉を引用する。

……テクノロジーの統制は、すべての社会集団や利害に恩恵を施すまさに理性の具像化であるかに見える――すべての矛盾は非合理的であり、すべての反対が不可能であるかに思われる限りにおいて……。

「ともに歩む」ことを知的・情緒的に拒絶することは、神経症であり無能であるかに見える。これが、現代という時代を印づけている政治的事象の社会・心理的側面なのである。つまり、産業社会の以前の段階になつては、新しい実存形態の可能性を表徴するかに思えたもろもろの歴史的な力の推移なのだ。

右の傍点はグローバードのものだが、かかる全称的形容は、マルクーゼの一般的認識範疇それ自体の一次元性をよく示している。「経験的主張に対する結果というものが、実際には、《全体化》シンタックスが正当化されるという概念的主張に依拠している」ことを、われわれは見透さねばならない。マルクーゼの分析においても、言語分析がもつとも《イデオロギー的》だ、と言われる。そもそも彼の科学、テクノロジーと現実の支配との関係は、論理的にそのように見えても、問題設定に誤りを犯しているのではないか。否定的思惟を不可能としている現代社会に、もしも突破口を見つけだそうとすれば、「方向転換へのチァンス」ということになるのも当然である。マルクーゼの挫折と怒りは、ニュー・レフトの革命的ロマン主義に燃える火をつけ、断末魔のような焔をあげたけれども、その彼方には「荒涼たるペシミズムの戦慄すべきメタファー」――エロス的文明か？――が展がつているだけである。希望をもつて迎えられている当の本が、グローバードにとつては失望の本であるということは、『ニュー・レフトの彼方に』の執筆者たちが、心底でみな感受しているに相違ない。

（奈良和重）

宮崎俊行著『現代日本農業法学の課題』

本書は、昭和四一年末に公刊された「請負耕作と農業生産法人」（鳳舎）以後に執筆された諸論稿を加筆整理され、さらに農業法関係の最高裁判例研究九篇を附章として併載されたものであつてA5版約二七〇頁からなるものである。まず、本書の内容をその構成の順序にしたがつて紹介しつつ、その要点と思われる主張を摘記することとする。

序章で、まず筆者は日本農業の状況を法学的に検討するに当つて取り上げるべきものとして次のごとき項目を指摘する。それは第一に、家族協定ないし相続問題、協業経営、集団的生産組織、法人化などの農業経営主体に関する問題、第二に、農地制度、牧野制度等の農業振興地域の設定およびその反面をなす都市計画法の問題などの国土計画利用に関する問題、第三に、農産物の販売、加工、消費および農業用資材の生産、購買、利用、消費等を含む経済問題、第四には、以上の事項に関連して資金集中、金融、補助金、税制の問題、各種の集団、団体、組織体の問題および関係当事者の思考方法、規範意識とその法的処理、第五に以上の諸問題を解決するための法学的方法があげられている。そして、これらの諸問題は相互に